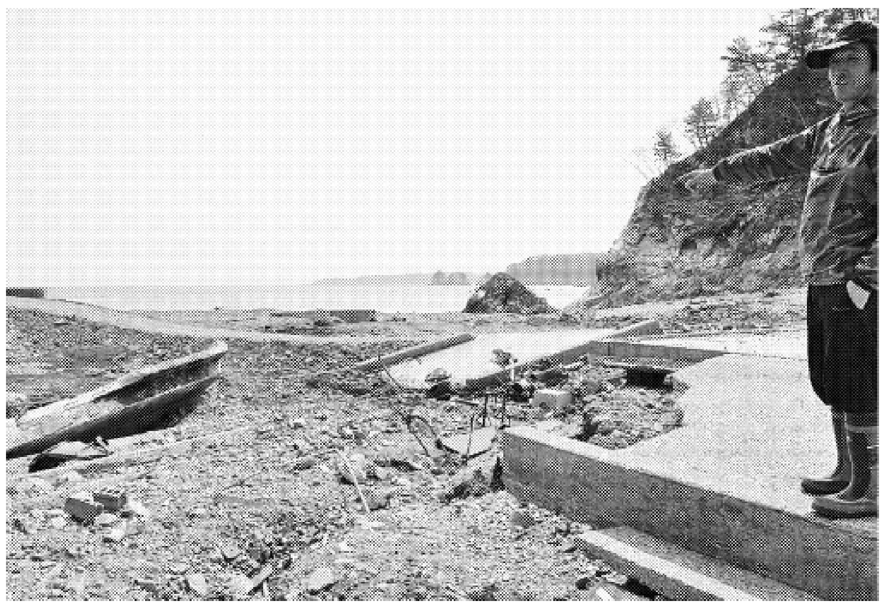
住民自ら道を復旧

港へ 海へ 再生へ一歩

宮古・樫内地区

宮古市田老の樫内（かしない）地区の住民は、津波で大きな被害を受けた樫内漁港までの市道約800㍍を自らの手で復旧させた。養殖ワカメなどの共同作業を通じ、地域の絆を強めてきた同地区の住民。いざというときに結束力を発揮し、自立の一歩を踏み出した。



津波で崩落した橋（手前）と樫内地区の住民が整備した迂回路（奥）

樫内漁港までの市道は漁船、漁具、建物のがれき、そして倒木が道をふさいでいた。しかし、被災は街全体。特に中心部の被害は甚大だった。住民たちは「市職員も忙しく、今の状態ではいつこの道が復旧するか分からない」と立ち上がった。

日々の結束 大きな力に

復旧には若手を中心に約15人が参加。道路をふさいだ杉の大木をチェーンソーで切り、がれきをトラクターで除去。近くの水道工事現場に残された重機を工事会社から借り、道路の陥没も直した。

漁港近くの橋も津波で崩れ落ちていたが、重機を使って迂回（うかい）ルートをつくり、作業開始から約5日で復旧。津波被害を免れた船を車で漁港に運ぶことができるようになり、沖から船で養殖棚に引っ掛かっていた9隻の船を引き上げることもできた。

同地区では、若者らが養殖ワカメを共同で経営している。一部収益は図書の寄贈に充てるなどの活動もしてきた。

漁業鳥居大樹さん(31)は「共同作業や手伝いは普段からあり、今回もそのつながりの中でできた。目の前にあること、それを少しずつしていけば、大きな力になるはず」と力を込める。

作業に参加した樫内地区の自治会長清水勝美さん(54)は「若い人が一生懸命動いてくれた。地区の復興のきっかけになればいい」と目を細めた。

力仕事は任せて

久慈東高野球部員 がれき撤去手伝う

久慈東高野球部の2、3年生18人は2日、津波で大きな被害を受けた久慈市長内町の水産加工工場のがれき撤去作業を手伝った。

工場は、マルサ嵯峨商店（本社普代村、嵯峨政嘉社長）の第2工場。嵯峨社長が同校野球部の後援会長で、同校に手伝いを打診したところ、同校野球部が快諾した。

部員は協力し、工場内から発泡スチロールや木材、がれきなどを運び出した。石橋智監督は「部として何かしたかったが、なかなかきっかけがなくもどかしい思いだった。部員にもいい勉強になったはず」と一緒に作業した。

堀米潤平主将(3年)は「被災の状況を見て、あらためて悲しくなった。やれることは一生懸命やっていきたい」と意欲を見せた。

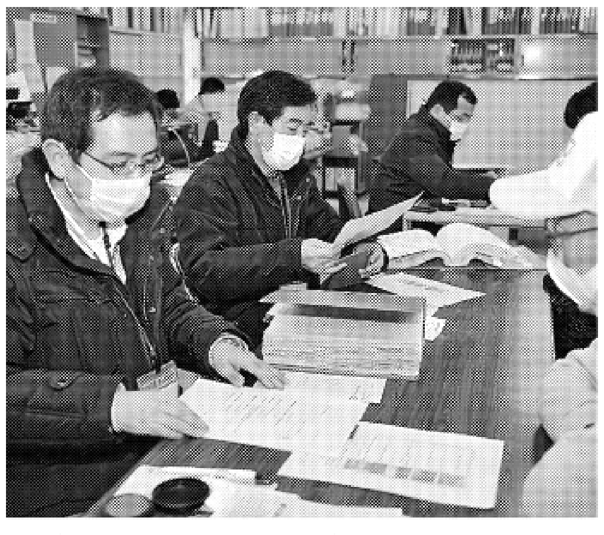
嵯峨社長は「生徒の協力は本当に助かる。再建に向け、越えなければならないハードルは高いが、必ず復興させたい」と誓う。同校野球部は3日も片付けを手伝う。

工場内のがれきを運び出す久慈東高の野球部員

税務署員、市役所サポート

罹災証明書の発行支援

宮古



宮古市役所で罹災証明書発行業務をする宮古税務署員

宮古市の宮古税務署の署員3人は、宮古市役所に出向いて罹災（りさい）証明書の発行支援をし、市民や市役所職員から喜ばれている。

同税務署から申し出、支援が実現した。担当する市税務課は避難所運営などに人手が割かれ、当初はわずか2人で証明書の発行に対応していた。申請は1日に400件を超えることもあり、交付まで4、5時間待ちの状況だったという。署員の支援もあり、現在は30分から1時間ほどになった。手続きの合間には、被災住民が悩みを打ち明けることもあり、署員は聞き役も同時にこなしている。

同税務署法人課税部門の八戸美千春上席国税調査官は「住民から『市役所の人も頑張っているね』と励まされている。少しでも住民の皆さんの力になりたい」と力を込める。

罹災（りさい）証明書は、被災者生活再建支援法に基づく支援金申請などに必要。受け取った住民はほっとした表情を見せ、窓口を後にしている。

励まし 歌声に乗せて

山田出身大石さん 盛岡で支援ライブ

山田町出身で盛岡市在住のシンガー・ソングライター大石光子さん(40)の「山田町支援チャリティーライブ」は2日、盛岡市の肴町商店街で開かれ、自作の歌で被災地を支援し、募金活動も行われた。

子どもの居場所づくりを支援する滝沢村のボランティア団体「こどものこと。研究所座（ざ）・いどばた」の主催。ライブでは大石さんが3月19日に書き上げた復興応援ソングを含むオリジナル5曲を披露。励ましの歌が商店街に響いた。

被災地支援のライブで熱唱する山田町出身の大石光子さん

実家が津波で被害を受けた大石さん。「自分たちにできることは何かないか」と同市在住の同町出身者らとライブを企画。「被災地と共に新しい一歩を踏み出したい。復興には時間がかかると思うが、支援は続けたい」と力強く語った。

山田町での炊き出し用募金も行われ、4万7623円が集まった。

被災地支援のため「よ市」で＋100円運動をした「たびれっじ推進協議会」の中本忍代表

「元気届けよう」盛岡

支援呼び掛ける 材木町・よ市開幕

盛岡市材木町の「よ市」は2日、材木町商店街で開幕し、東日本大震災の被災地へ元気を届けようと、多くの出店が買い物客らに支援を呼び掛けた。

94店が出店し、青果や手作りの菓子などを販売した。歴史に残る大災害から3週間、よ市を開催している実行委や多くの店舗が義援金を集めた。

グリーンツーリズムなどを推進している一関市の「たびれっじ推進協議会」は、同協議会員店の「オウルの森」で「＋（プラス）100円運動」を展開。一関周辺の農産物などを、通常価格に100円上乗せして販売。上乗せ分で被災者支援事業を進める。

同協議会の中本忍代表は「運動の意味を理解して買ってくれた」と手応えを感じていた。

災害弱者の支援

盛岡事務所開設 東京のNPO法人

NPO法人難民を助ける会（東京都、長有紀枝理事長）は盛岡市津志田南1丁目に盛岡事務所を開設し、東日本大震災で被災した本県の復興を支援している。

同会は3月13日に仙台市内に事務所を設置。本県や宮城県内の避難所などに物資を配布。同26日までに水11㌧、米2㌧、軽油1万3600㍑、下着・衣類2万枚などを届けた。

スタッフが常駐する盛岡事務所は3月末に開設した。関係機関と連携を強化し▽高齢・障害者施設や支援が行き届きにくい場所への食料品や生活必需品の配布▽中長期的計画で実施する高齢・障害者施設の再建―などを目指す。

同会はインドネシア・スマトラ島沖地震緊急支援など海外での活動経験が豊富。野際紗綾子シニアプログラムコーディネーターは「経験を生かし地域に寄り添い支援する」と強調する。

緊急募金も行っている。郵便振替（00100―9―600難民を助ける会）は、通信欄に東北関東大震災と記入。問い合わせは同会（03・5423・4511）へ。

学校生活 先輩が支え

東京在住の大船渡小卒業生

ランドセル480個贈る

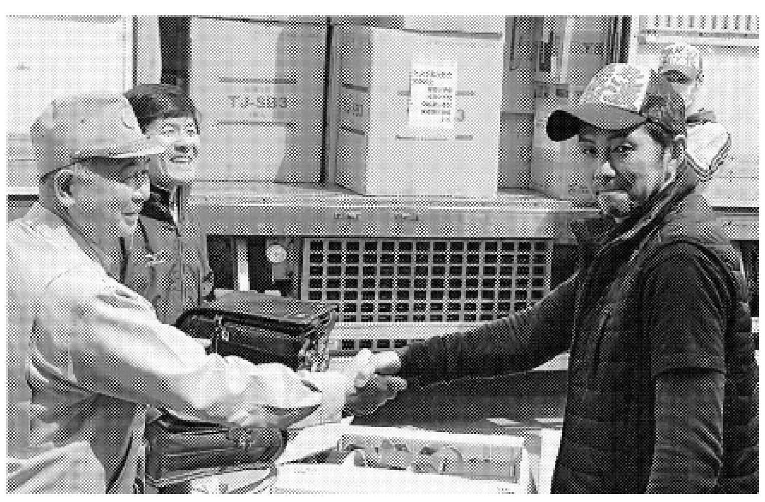
大船渡小（柏崎正明校長、児童268人）の卒業生、東京都葛飾区の白鳥小PTA副会長松本和嘉子さん(43)らは2日、大船渡小にランドセル約480個を贈った。

届けたのは大船渡小卒業生で東京都調布市の会社員石川勝則さん(38)。松本さんから連絡を受け、仕事を終えた同日午前3時に同僚とトラックで出発し、9時間後に大船渡市役所に到着した。

恩師の今野洋二・市教育長や柏崎校長の出迎えを受けた石川さんは「早く届けられてよかった」と安堵（あんど）した。

松本さんは、大船渡市のいとこ大津磨司子さん(37)から大船渡小の児童55人が津波でランドセルを失ったことを聞き、白鳥小PTAから寄贈を募り、善意の輪を広げた。

松本さんは「古里の子どもたちが普段の学校生活に戻る一助になればうれしい」と願った。ランドセルは同校だけでなくほかの県内被災児童にも配布される。



ランドセルを届け今野洋二教育長と握手する石川勝則さん（右）

被災地から

いわて生協、牛丼提供

いわて生協（本部滝沢村、飯塚明彦理事長）は2日、大船渡市、宮古市の避難所12カ所で「牛丼1万食炊き出しプロジェクト」を実施。大船渡中では450食を提供し、被災者は久しぶりの熱々の丼を楽しんだ。

同校には職員や組合員のボランティアら9人が訪問。お昼に炊きたてのご飯に乗せた野菜たっぷりの牛丼を振る舞った。

いわて生協のボランティアからできたての牛丼を受け取る被災者

大船渡市大船渡町で被災し、同校の避難所で暮らす増田千恵子さん(57)は「ものすごくおいしくて、全身が喜んでいる。気持ちも明るくなった」とうれしそうに頬張っていた。

同プロジェクトは、全国肉牛事業協同組合から牛肉やタマネギなどの提供を受けて実現した。3日は山田町、9日は大槌町、10日は陸前高田市で行われる。

▼宮古　温かい食 活力に　▲大船渡

温かいスープが入った紙コップで「乾杯」する被災者

自衛隊がスープ配る

宮古市の避難所の一つ、同市田老のグリーンピア三陸みやこで1日、給食支援をしている自衛隊が特別食として温かいスープを配り、被災者の心と体を温めた。

陸上自衛隊第11旅団第28普通科連隊（函館市）が特別食を企画。同隊の石田利光1等陸尉は「みなさんの困難に立ち向かう我慢強さに驚いた。けっぱれ田老」と呼び掛けた。

隊員はニンジンとタマネギ、豚肉などが入ったスープを作り、紙コップに入れて夜食として被災者に配った。

夫の山本栄一さん(72)と避難している昭子さん(68)は「久しぶりの温かい食べ物はありがたい。避難所の皆さんとも楽しくやれている」と喜んでいた。

同地区では3月31日と4月1日、避難所運営を効率的に行うため、七つの避難所を同施設に集約し、約700人の被災者が共同生活をしている。

久慈署野田駐在所に着任した三上喜春警部補（右）と鈴木佑佳巡査

2人体制に増員 震災対応を強化

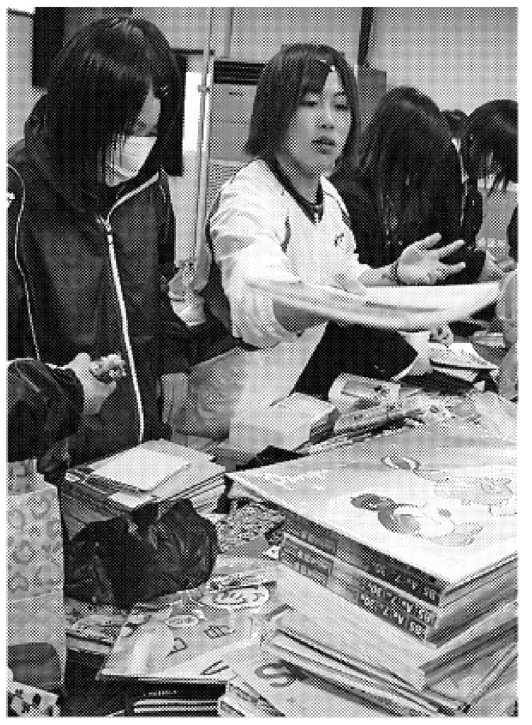
久慈署野田駐在所

久慈署（中村一雄署長）は、東日本大震災の被災者対応や警察業務を強化するため野田村の野田駐在所の警察官を1人増員し、2人体制とした。

1日付で着任したのは、同署久慈駅前交番勤務だった三上喜春警部補と同署刑事課から異動した鈴木佑佳巡査。三上さんは駐在所長で、女性の鈴木さんは女性被災者への対応が必要と考えられ、配置された。

2人は地域住民や関係団体と一緒に被災地での犯罪抑止のため活動するほか、被災者が安心して暮らせるよう各種相談にも応じる。

三上さんは「2人が居て心強いと村民から思われるよう、活動を強化したい」と意欲を示し、鈴木さんは「村民から何でも相談してもらえるように頑張りたい。女性の精神的な悩みも聞いてあげられるようになりたい」と村の復興に力を貸す。



持ち寄った文具類を仕分けする花巻市内の高校生たち

学ぶ手助け 私たちも

花巻市内の中高生団体 学用品を持ち寄る

花巻市内の中高生のボランティア団体「はなまきUC」は2日、同市花城町の花巻商工会議所で釜石市の学生のために救援物資の収集などをした。

UCのメンバーや市内の高校生有志約60人が参加。被災地の学校再開に向け、津波で学用品をなくした児童生徒のためのノートや筆記具を持ち寄って仕分けしたほか、市内のスーパーなどで義援金を集めた。

代表の花巻南高3年小田島大樹君は「報道で被災地の高校生が頑張る姿を見て、居ても立ってもいられなかった。少しでも励みになり、役に立てれば」と語る。

集めた物資は3日、釜石市のボランティアセンターに届ける。

■宮古市消防団長に2期目の辞令　宮古市の山本正徳市長は1日、同市消防団長の山下修治さん(71)に2期目の消防団長の辞令を交付した＝写真。

交付式は市役所で行われ、山本市長は「消防団の力が発揮され、市民が頼りにしている。先頭に立って頑張ってください」と激励し、辞令を手渡した。

山下団長は「今まで経験していないことが起きている。あらためて責任の重さを感じ、頑張りたい」と意気込みを新たにした。

同消防団員の津波による死者、行方不明者は18人。ポンプ車で避難を呼び掛けた団員や水門閉鎖をしていた団員が津波に巻き込まれた。団員は今も不明者の捜索活動を懸命に続けている。

山下団長の任期は4年。多くの仲間や市民をのみ込んだ津波に負けず、団員の先頭に立ち、復興に向けて努力することを誓っている。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。